

2011年7月16日(土)

京都精華大学国際マンガ研究センター＋京都精華大学大学院マンガ研究科＋科学研究費補助金「女性 MANGA 研究」共催公開研究会

『女性マンガ』という視座 マンガ研究科の5つのタマゴたち 報告資料

「うすっぺら」な女性キャラクターの存在意義——表現論からみる BL マンガ——

京都精華大学大学院 マンガ研究科 修士課程 マンガ専攻 千田真菜

はじめに

男同士の恋愛や性愛を描くことが前提条件の BL マンガにおいて、必ずしも女性キャラクターは描く必要がなく、その扱いは神経質なまでに配慮が求められるため敬遠されている。例えばマンガ家のヤマシタトモコはインタビューで次のように述べている。

「BL は基本的に男性の物語で、女子が出てくることを嫌がる読者さんもいますので、女子があまり登場しないようにという編集部側からの要望もあった」（ヤマシタ、2009、p. 16）

ここからも分かるように BL マンガで女性キャラクターはある種タブーとなっている。しかし、評論において BL マンガを高く評価する際には、「この作品は（普通の）BL マンガではない」といった語られ方がよく見られ、その多くの理由に女性キャラクターがしっかり描かれていることが挙げられている。言い換えるとつまり、この作品はもはや BL マンガという枠だけではくくれない。なぜなら、女性キャラクターさえもリアリティや背景を持たせ、しっかり描いているからだ。

本稿では、こうした批評を出発点に評価されてこなかった BL マンガにおける女性キャラクターに存在意義を見出し、女性読者にどのように読まれるのか、その一端を明らかとしていく。分析対象は、評論や紹介などで語られ、BL マンガとして読まれている作品とした。

BL マンガの評価基準——定着した見解——

これまで BL マンガの評論において女性キャラクターはどのように語られてきたのだろうか。ここでは吉本たいまつが、古街キッカの『さくらにあいたら』を紹介している文を引用する。

「BL には時折、男二人を結びつける女性が登場する。…略…こうした女性は役目が終わると即座に退場することが多い。なぜなら彼女らは攻受を接近させるための障害でしかないからだ。…略…ところがこの作品では違う。…略…ストーリー

の進行に重要な役割を果たすだけでなく、かっこよく、自立した、しかし恋する女性として描かれている」(吉本、2007、p. 235)

この文からも分かる通り BL マンガで女性キャラクターは重要な役割を与えられることが少なく、周縁化されて描かれることが多い。そして、評論においては、女性キャラクターが男性キャラクターから自立して描かれることを評価ポイントとしているようだ。また、BL マンガに造詣の深い作家の三浦しをんが、自身の BL エッセイ本で紺野けい子の『愛の言霊』について紹介している文を引用する。

「紺野けい子が描くボーイズラブ漫画のなかの女の子は、男たちの恋愛の単なる傍観者ではない。もちろん、ただ闇雲に横槍を入れるだけの敵対者でもなく、ましてや、男たちの関係を補強するためだけに利用される、当て馬なんかでは決してない。考え、感じ、主人公の男に恋をする女の子なのだ」(三浦、2006、p. 83)

これも同様に、自立した女性キャラクターがしっかり描かれた作品を素晴らしいと見る見解である。このような見解は既存のジェンダー規範に囚われない女性キャラクターを称賛するものの、その一方で自立していないような女性キャラクターは語り得ていないのではないだろうか。

まずは、先の高評価の女性キャラクターがどう描かれているか、その表現を見ていく。

高評価な女性キャラクターの表現

『さくらにあいたら』の女性キャラクター・沢田は吉本の言うように「自分の意思を明確に持った女性」であり、男性カップルを応援する理解者として描かれている。そして、三浦が取り上げた『愛の言霊』の女性キャラクター・ゆきちゃんも自立した女性であり、男性カップルの関係に気づいているかは明示されないが、二人の仲を見守る女性として描かれている。この二人には表現上にも共通点があり、それは両者ともモノログが使用されている点だ。モノログは、読者のキャラクターへの自己同一化を促す最も効果的な表現の一つである。



図1 紺野けい子 『愛の言霊』フロンティアワークス 2000 pp. 50-51

沢田のモノログは、バルーンの種類のみだが、ゆきちゃんのモノログは、バルーンや四角い囲みのもの、バルーンに入っていないものなどがあり、多いところでは見開き1ページにモノログが三層にもなっている。[図1]

それは、この回のエピソードが主人公の男性カップルを第三者の目線から語る「証言型」の形式をとっており、ゆきちゃんが語り手として描かれているからだ。

彼女たちにはもう一つ共通点がある。それは男性カップルのどちらかにほのかに想いを寄せている点だ。「ほのかに」という点が重要で、彼女たちは男性カップルたちを異性愛へ誘うことは無く、応援しつつ見守っているという立場なのだ。それは、BLマンガを好む女性読者に近い存在である。男性キャラクターは好きだけれど、男性カップル二人のことを応援したい気持ちが勝るのは、読者の想いを代弁しているかのようだ。そのため、モノログを用いて読者に感情移入させているのだろう。しかし、多くのBLマンガにおいて女性キャラクターにモノログが与えられることはない。BLマンガの読者は、メインの男性カップルに焦点を当てているので、周縁化される女性キャラクターに感情移入させる必要がないのだ。

BLマンガの連続的なランキング本『このBLがやばい!』が初めて刊行された2008年から最新刊の2011年度版のベストテン全40作品中、女性キャラクターにモノログが使用されているのは3点である。それでは、残りの37点の女性キャラクターは評価し得ないのだろうか。本稿では、こうした「うすっぺら」な女性キャラクターを「モノログが無い、セリフが無い」という2つの表現形式に着目し分析していく。

「うすっぺら」な女性キャラクターの表現

多くのBLマンガに登場するモノログの無い内面的に「うすっぺら」な女性キャラクターはどのように描かれているのだろうか。例えば、草間さかえの『肉食獣のテーブルマナー』冒頭1ページ目の画は、主人公がカップルキャラクターとなる相手の男性について、モノログで語っているのだが、その四角いモノログが女性キャラクターの顔に重なっている。[図2]



図2 草間さかえ『肉食獣のテーブルマナー』コアマガジン 2007 p.65

あとほんの少しモノログを左へずらせば顔に重ならないにもかかわらず、あえて重ねているのは、主人公が関心を寄せるのは女性ではなく男性キャラクターであることを分かりやすく示している。これほど明確に示すのは、私たち読者の現実社会が異性愛主義であるために、主人公が彼女を見ていないことを強調する必要があるからだろう。もちろん彼女はこの後にも先にも登場せず、セリフやモノログ、固有名もない。モノログの重なった顔と後ろ姿しか描かれれないのだ。だが、この画があることで男性が男性を愛する物語がスムーズに進められているといえるだろう。

ここで主人公は女性キャラクターには全く言及しておらず、彼女はどんな人物なのかということよりも性別が女性であるということが何より重要であるかのようである。この女

性キャラクターを描くことによって、男性キャラクターがカッコよく、女性からもモテるということを示している。彼女は設定の上では人間の女性だが、女性という記号だけが前面に出てきている。そこに深みのある女性キャラクターは必要がないだろう。

上野千鶴子が少年愛マンガの分析の際に指摘したように男女というだけでお似合いとなる異性愛主義の安直なルールに対するアンチテーゼに見受けられる。しかし、上野がこう主張する際には女性読者の「女性嫌悪」が背景となっていた。しかし現在、こうした表現が読者に本当に「女性嫌悪」を意識させるかということ、いささか疑問だ。なぜなら、うすっぺらな女性キャラクターは、現実の女性を想起せず、嫌悪感を得ずに自然に受け取れてしまうからだ。「お約束」として成り立っているものから、当初のような女性嫌悪が読み取られることは難しいだろう。

まなざしから解放された女性キャラクター

水城せとなの「窮鼠シリーズ」に登場する女性キャラクターたちにはモノローグが無いが、識者に高く評価され、さらに続巻が『このBLがやばい！2010』で1位を獲得している。物語は不倫を繰り返していた恭一がある日、大学の後輩で妻の依頼した興信所の調査員である今ヶ瀬に浮気を報告しないことと引き換えに関係を迫られるところから始まる。

まず錫名桐子がこの作品を高く評価した紹介文を引用する。

「なぜこの作品がそんなに熱烈な支持を得たかといえば、乱暴に言えば『BLではないから』だろう。その理由は第一に、女性がきちんと描かれていること。主人公の恭一と今ヶ瀬には、妻から元同級生まで多様な女性が絡むが、その誰もがしっかりしたキャラクターと背景を持つ。女の存在は節々で鍵となり、彼女たちの魅力も愚かしさも鋭く描かれる」（錫名、2007、p. 239）

錫名は作品を高く評価する要因の第一に、登場する女性キャラクターの誰もがしっかりしたキャラクター背景を持つことを挙げている。本稿の分析では一番初めに登場する妻・知佳子と主人公の恭一が一緒にいる場面を取り上げる。なぜなら、知佳子は男性カップルを最初に結び付けるという点で重要だと思われるからだ。

知佳子が最初に登場するのは、今ヶ瀬に強請られて行ったホテルから主人公・恭一が帰宅した場面である。恭一が帰宅すると部屋は暗く、知佳子は先に寝ている。寝ている妻を見る恭一が描かれたコマで次のページへ行き、今ヶ瀬にキスされた時の回想の直後に赤くなっている恭一が一コマ入り、またキスシーンの回想が入ると、その後「眠れない」と赤くなっている恭一のコマが入るといのように、キスシーンの回想と妻という現実との入れ子状になっている。妻の登場の効果としては冷めた日常の場面を見せることによって今ヶ瀬とのキスシーンを鮮明化させているようだ。ここでは、恭一の妻に対する浮気の罪悪感や妻が浮気調査を依頼したことに対する不信感など恭一が妻にどんな感情を持っているかが一切触れられていない。

次に知佳子が登場するのは、今ヶ瀬にからかわれていると勘違いして怒った恭一が「俺と知佳子には夫婦の絆があるんだから…」と豪語して帰宅する場面だ。帰宅した恭一を知佳子は離婚届を提示して待っていた。「別れてほしい」という妻に待ったをかける恭一だが、モノログでは「今ヶ瀬さすがに仕事が早い」と、今ヶ瀬へのツッコミをしている。[図3]



図3 水城せとな『窮鼠はチーズの夢を見る』
小学館クリエイティブ 2006 p.30

さらに、恭一が知佳子に離婚を考え直すように説得する場面でも今ヶ瀬の顔が回想されており、表面的には離婚を止めようとする恭一だが内面的には今ヶ瀬への語りかけが中心に描かれている。恭一が目の前の妻と会話していながらも、妻を見ていないことが浮き彫りとなっているのだ。

この作品は、錫名の言うようにキャラクターやストーリー設定では、女性キャラクターが重要な役割を担っていると言えるかもしれない。しかし、モノログを持つことのできないという点で、表現の面からは、女性キャラクターは周縁化されている。むしろ、女性が画面には登場するものの、全く見られていないことが強調されているのだ。それは女性を「見られる存在」におとしめることへのアンチテーゼのようである。

つまり、「うすっぺら」な女性を描くことによってまなざしの抑圧から、女性を解放しているように見受けられるのだ。

金田淳子は男性同性愛を題材とした二次創作活動のやおいについて、次のように述べている。

「やおいを性からの逃避、あるいは女性嫌悪とみなすものがあつた。しかし厳密にみれば、やおいにおいて回避されているのは、性や女らしさではなく、女性を性的対象としてみる（性的対象としてしかみない）まなざしではないだろうか。」
(金田、2007、p. 177)

BL マンガにおける女性キャラクターも、まさしくこれを体現しているかのようである。女性キャラクターはBL マンガにおいて、まなざされる客体ではないため男性カップルに無視されても、うすっぺらに描かれても読者は全く痛くないだろう。それは、読者が「見られることの回避」を選択したときに、引き受けたポジションであるからだろう。

おわりに

BL マンガは現在、ジャンルとして定着するまでに至ってはいるが、男性が男性を愛する物語には、未だ多様な手続きが要されているようだ。さらに、BL マンガで女性キャラクターが「うすっぺら」に描かれるのは、男性キャラクターからのまなざしを回避するという一面があると思われる。つまり女性キャラクターが虐げられたり、うすっぺらなのは、ジェンダーの抑圧を受けているからではなく、あえてそう描くことで性役割からの逸脱を試みているのではないだろうか。

また、本稿では「うすっぺら」な女性キャラクターの歴史的な変遷を見ていくことができていないので、今後の課題としたい。

参考文献

- 上野千鶴子『発情装置—エロスのシナリオ』筑摩書房、1998年
金田淳子「マンガ同人誌 解釈共同体のポリティクス」『文化の社会学』有斐閣、2007年、pp. 163-190
錫名桐子「このBLがすごい! '07」『ユリイカ BL スタディーズ』青土社、12月臨時増刊号、2007年、p. 239
高橋すみれ「『やおい化』する視線、その戦略にむけて—『DEATH NOTE』同人漫画を例に—」『女性学年報26』2005年、pp. 20-40
西原麻里「『交換』を必要としない世界の“隣人”」『マンガの不文律 サブカル・ポップマガジン まぐま Volume 17』文藝書房、2009年、p. 8-16
三浦しをん『シュミじゃないんだ』新書館、2006年
溝口彰子「ホモフォビックなホモ、愛ゆえのレイプ、そしてクィアなレズビアン - 最近のやおいテキストを分析する」『クィア・ジャパン』Vol.2、勁草書房、2000年、pp. 193-211
ヤマシタトモコ「08/09 話題の人インタビュー ヤマシタトモコ」『月刊ぱふ』雑草社、4月号、2009年、pp. 16-17
吉本たいまつ「このBLがすごい! '07」『ユリイカ 総特集 BL スタディーズ』青土社、第39巻第16号、2007年、12月臨時増刊号、p. 235

参照作品（[] は図版引用部分）

- 草間さかえ『肉食獣のテーブルマナー』コアマガジン、2007年 [p. 65]
紺野けい子『愛の言霊』フロンティアワークス、2000年 [pp. 50-51]
古街キッカ『さくらにあいたら』大洋図書、2007年
水城せとな『窮鼠はチーズの夢を見る』小学館クリエイティブ、2006年 [p. 30]